

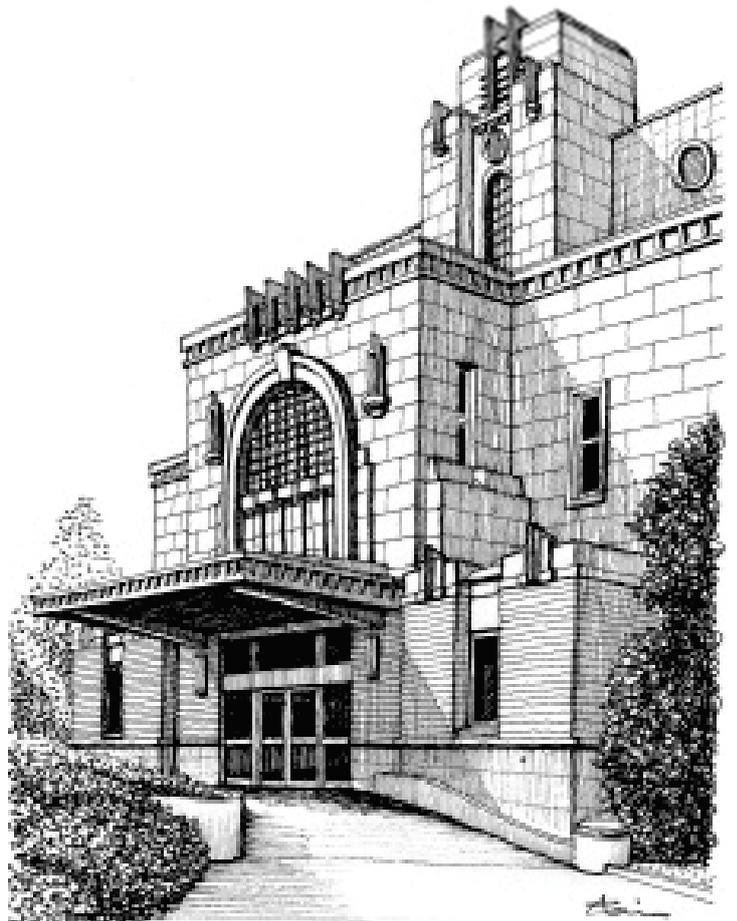
見  
本

(仮題)

# ヘリテージ・スケッチ 3,000

そこに込められた思いとは？

2026年6月出版予定  
ペン画 500点以上収録  
2,500円(税込、予定)



# 目次

## 第一章 スケッチを始める

兵庫県営繕課

出先機関への異動

三田建築探検隊

千枚のスケッチ

白髪の画伯との出会い

営繕復帰

神戸高校校舎建替え

## 第二章 ヘリテージマネージャーの養成

阪神淡路大震災

復旧から復興へ

兵庫県建築士会会報『つどい』

そもそもの発端「つくりたいんやけど」

兵庫県ヘリテージマネージャー養成講習会

広告塔としてのスケッチ連載

係長昇格 芸術文化センター整備室

芸術文化センターの工事現場にて

## 第三章 アメンバー型ネットワーク

受講生の思いを形に

得体のしれない組織

二重のネットワーク構築へ

地区世話人と地区懇談会

ひょうごヘリテージ機構H<sub>2</sub>O

この指とまれ方式

アメンバー型ネットワークを実現するために

『兵庫ふるさとスケッチ』出版と個展開催

#### 第四章 時代の変化への対応

一〇年責任論

自由と責任

各地区にNPO法人が誕生

ヘリテージマネージャーの一般への浸透

旧グッゲンハイム邸

時代の変化「地方消滅」

地域の共有財産に・・・モダン建築祭

元廃墟マニア

ヘリテージコーディネーター

兵庫県立博物館

#### 第五章 ヘリテージ 兵庫から全国へ

全国に先駆けて

全国ヘリテージマネージャーネットワーク協議会

協議会運営副委員長

全国の動向とスケッチ取材

北海道／東北／関東・甲信越／東京／東海・北陸／近畿／

中国・四国／九州

#### 第六章 海外旅行とスケッチ

最初の海外旅行 一九九〇

イタリア／中国／韓国／トルコ／中欧五か国

付録

私の描画作法



白髪の画伯との出会い。

しかし、このまま我流でよいのか、という迷いもあった。

そんなある日、篠山の町はずれの草むらで民家を描いている白髪の老人に出会った。茅葺き民家をカメラに収めている私に、その老人は

「あそこの池にカメラを捨ててきたら」

「・・・」

「あなたは絵を描きたがっている」

まるで預言者のように話しかけてくる。どう答えてよいか迷っていると、横から女房が、私なら絶対しない質問をし始めた。

「絵が上手くなるにはどうすればいいですか」

「上手くなる必要はあるの？ 絵が楽しむものでしょう」

そういった後、白髪の画伯は、ようやく九州で絵で飯が食えるようになったが、春と秋にここへ来て、こんな風にスケッチをしているのは、子供のころに描いた絵をいまだに超えられないからだ。

「あの頃は楽しかった」

と目を細めて言う。

「絵を楽しむにはどうすればいいですか？」

知らず知らずのうちに質問していた。しばらく私の顔を見つめていた老画伯が

第一章 スケッチを始める

丹波篠山市八上の茅葺き民家  
このあたりで白髪画伯と  
出会った。





「いいことを教えてあげよう。画用紙のサイズを決めること、水彩か色鉛筆かペンか、道具を決めることだ。そして、迷わず二〇〇枚描いてごらん。きっと、楽しくなるから」と。

さらに、

「人に教わるのもいいが、なかなかその人を超えられるものではない。絵は楽しむものときめれば、我流に徹するのも一つの方法だ。我流に徹すれば、貴方にしか描けない絵が描けるようになる」

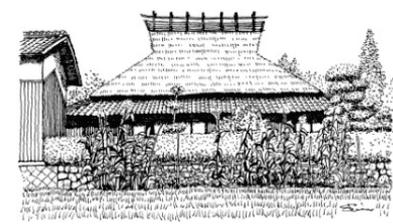
この時、スケッチを一〇〇〇枚描こうと決めたのは間違っていないなかった、これでいいんだ、迷わず続けていけばいいんだと思い、不思議なくらい気が楽になっていった。

三〇〇枚を超えたあたりから、描くことが楽しくなってきた。描き込んでいくうちに、そこに当たり前のようにある建物や風景が語りかけてくることに気づいた。ペンは対話の痕跡をとどめていく……。一日の終わりにスケッチを仕上げたとき、今日もいい日を生きたと思う。

### 営繕復帰

四二歳の時、一〇年間の出先機関勤務を終え、念願の営繕課に戻る。この一〇年間に営繕課は様変わりしていた。ローテクの時代は終わり、ハイテクの時代へと移行していた。手計算で作成していた内訳書は表計算ソフトで作成するようになって（中略）

三田の茅葺き民家①



2008～9年の作品（一部）



旧大阪商船（福岡県門司市）



傾いた蔵（兵庫県上郡町）



加西の民家（兵庫県加西市）



乗田家住宅（佐賀県鹿島市）



银山温泉（山形県尾花沢市）

(前略) 得て、第一回アドバンスコース研修会が開催された。

続けて、第二回アドバンスコース研修会「登録文化財申請のための所見作成」が行われる。所見(評価書)は県教委段階でのチェックを受けるのだが、多くの場合、真っ赤になって戻されてくる。「根拠は? なぜそう言い切れるのか? 構造・形式を正確にもれなく! 決め文句が必要!」申請書は情け容赦のない赤い文字で埋め尽くされている。もう一度所見の書き方について勉強し直す必要があった。当初作成した所見と修正後の所見を比較しながらの研修会となる。

この指とまれ方式は、このように具体的な活動の中で、直面した課題に対する再度の学習といった形で受け継がれていった。それは、アドバンスコース研修会だけではない。地区の活動のほとんどすべてがこの方式で実施されている。誰かが「テーマ」と「フィールド」を決めて提案しさえすればいいのだ。フロンティア開拓には、この方式がもつとも適しているといえそうだ。

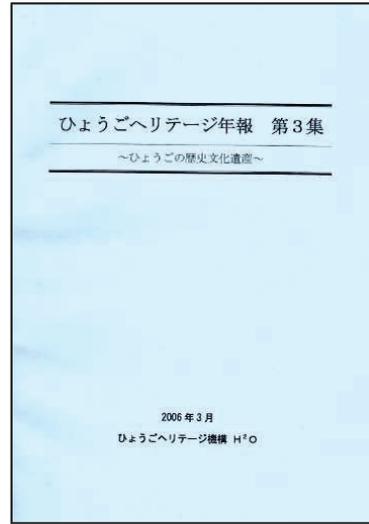
こうして、草創期一〇年間の試行錯誤が始まった。

### アメンバー型ネットワークを実現するために

アメンバー型ネットワークを実現するために採用した考え方は、

一つは、本部―支部制ではなく独立性のある「地区制」を採用した。地区のことはすべて地区が決める。つまり、地区の運営に対してはだれの指図も受けないという独立性を有するということである。

情報の集約・共有のツールとしての  
「ひょうごへリテージ年報」  
調査編・活動編・資料編の三編構成



二つは。会長・委員長制ではなく、世話人制を採用した。世話人とは文字通り世話をする人であり、指示権や決定権は持たない。また、世話人会は決定機関ではなく、緩やかな合意形成の場となる。

三つは、誰に指示されることなく自発性を発揮できる「この指とまれ方式」の採用である。ことを始めるにあたって誰かにお伺いを立てることも許可を求める必要もない。誰がどこで何をやっているか、といった情報を集約し共有できる仕組みがあればいい。権利のみあって義務のない組織という夢のようなことを考えたのである。

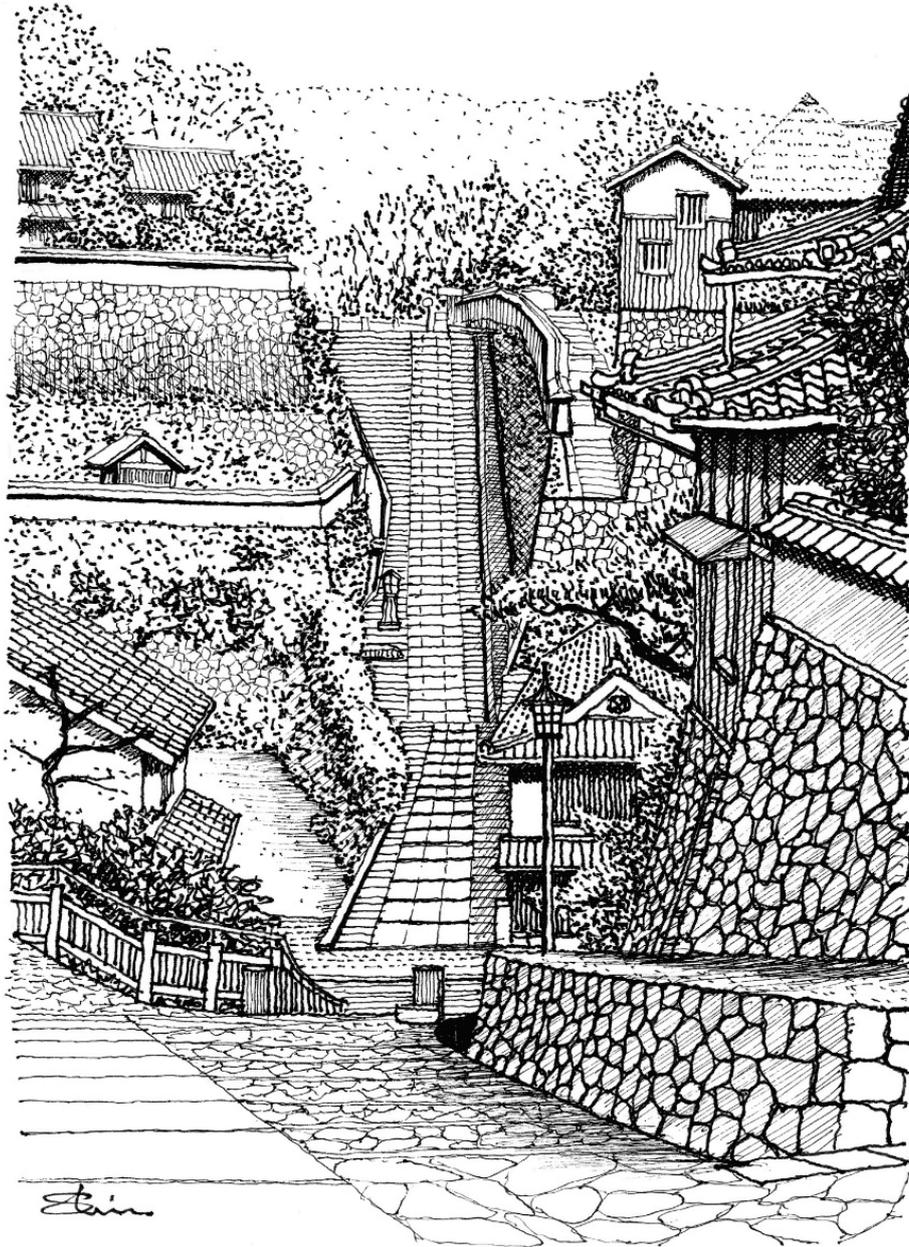
以上三点がひょうごへリテージ機構H<sub>2</sub>Oに浸透していくことを目指したが、すんなりと進んでいったわけではない。ピラミッド型組織に回帰しようとする動きとのせめぎ合いは当時も今も続いている。

アメーバー型ネットワークを発想した背景には、私個人の思いが色濃く作用している。当時、中間管理職の県職員の立場で仕事をしていたが、自分の考えとは馴染まないことが数多くあった。立場上、県の方針を実行しなければならず、そのためには自分の意見を封じなければならない。自分を殺さなければならなかった。

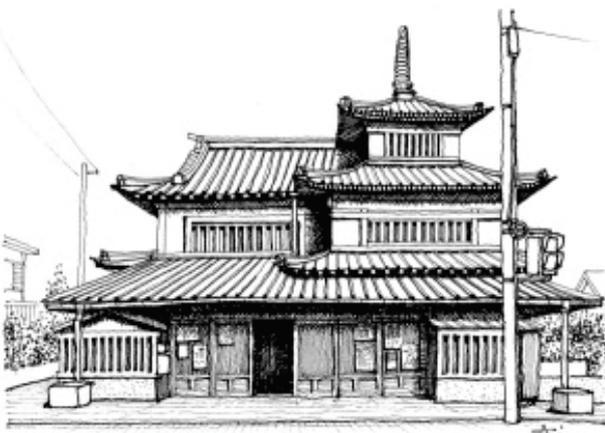
このことは公務員に限ったことではなく、社会で生きていくにあたってはだれもが直面しているはず。せめて、自分の自由になる時間ぐらいは、自分を殺すことなく自由に生きたいと思う。自由な時間は楽しいものでなければならぬ。

振り返ってみれば、そんな思いがあつて、アメーバー型ネットワークを発想したような気がしている。

ところが、これまで順調に進んできたかと思われたひょうごへリテージ機構（後略）



坂の城下町（大分県杵築市）



寸松堂（神奈川県鎌倉市）



武家屋敷（山口県萩市）

沢田伸スケッチ集出版プロジェクト